

聖書:ルカの福音書15章1～10節

説教:一人の罪人が悔い改めるなら

はじめに

ここに出て来る、いなくなった一匹の羊を捜しに行く話しはどこかで一度は聞いたことがあるでしょう。そのたとえ話の意味については、神はどのようにして罪人である私たちを探し出して、元の群れへと連れ戻してくださる方である、そんなふう

に説明され、なるほどとすんなりと納得できるでしょう。今日目を留めていきたいのは、「大きな喜びが天にある」あるいは「神の御使いたちの前には喜びがある」という箇所です。一人の罪人が悔い改めて救われることが、これほど大きな喜びだと言われるのなら、私たちが小さいと思えるような祈り続けていくことにも何か意味があるのではないか。今日はそのことについて考えてまいります。

## 1 二つのたとえ話

### 1) いなくなった羊

パリサイ人、律法学者は、罪人と一緒に食事をしてはならないと教えています。ところがイエスは自分に反対する者たちの目の前で、堂々と食事をする。私はへそ曲がりですが、イエスもそうだったのか。もちろんそんなことはないはずですが、4節を読みます。「あなたがたのうちのだれかが羊を百匹持っていて、そのうちの二匹をなくしたら、その人は九十九匹を野に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。」

五年前に北海道聖書学院の海外研修があったとき、学生の引率という立場でモンゴルに行かせていただきました。ご存じのようにモンゴルでは羊と馬の飼育が盛んで、柵も何もない地平線が見えるような草原に放牧されていました。馬や羊は群れるという習性があるので、それができるわけです。しかし、中にはいなくなってしまうことがある。私たちが休憩のために車を駐めて休んでいたら、バイクに乗った青年がやってきて聞いてみると、いなくなった馬を探しているのだと言っていました。イスラエルでも同じで、牧者はいなくなった一匹を探し歩く。そして、羊が見つかるころです。5、6節。「見つけたら、喜んで羊を肩に担ぎ、家に戻って、友だちや近所の人たちを呼び集め、『一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけたから』と言うでしょう。」

いなくなった羊を探すのはわかりますが、友だちや近所の人たちを呼び集めて「喜んでください」とまで言うかどうか。ちょっと大げさすぎるような気がします。

### 2) なくした銀貨

そこで二つ目のたとえ話ではどうなっているか、見てみましょう。8節。「また、ドラクマ銀貨を十枚持っている女の人が、その一枚をなくしたら、明かりをつけ、家を掃いて、見つけるまで注意深く捜さないでしょうか。」

ドラクマ銀貨一枚は一日分の賃金に相当したそうです。そんな銀貨十枚が全財産でしたから、一枚でもなくなったとなれば大変なことです。当時の家は小さい窓しかなくて、家の中はうす暗い。よく捜すためにはあかりをつけなければなりません。また家の床は土を踏み固めた土間になっているので、下に落としたり土ほこりのなかに隠れてしまうことがある。それで「家を掃いて」とあるわけです。みなさんも、大事なものがなくなったときは大騒ぎをするでしょう。ですから8節はよくわかる。では9節はどうでしょうか。「見つけたら、女友だちや近所の女たちを呼び集めて、『一緒に喜んでください。なくしたドラクマ銀貨を見つきましたから』と言うでしょう。」

たとえば家の中に高価な宝石を保管していて、それがなくなってしまい、青くなりながら家中捜したらやっと見つかったとします。近所の皆さんを集めて「喜んでください」と言うでしょうか。そんなことをしたら、「嫌み」と思われますよね。最近は大変物騒ですから、こんなことを言いふらしたら強盗に入られるかもしれません。見つかったら自分だけ喜んでおしまいです。

## 2 大きな喜びが

### 1) 天にあるのです (これから先に)

たとえ話というのは、神の真理をわかりやすく解き明かすために、わざと大げさに誇張することがあります。この場合、友だちや近所の人たちを呼んで一緒に喜ぶところはどこでも誇張です。イエスはそのところを強調したいようなのです。では、7節と10節が同じことを言っているのかと思うと、微妙に違う。比べてみましょう。7節はこうです。「あなたがたに言います。それと同じよう

に、一人の罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人のためよりも、大きな喜びが天にあるのです。」

「大きな喜びが天にある。」日本語訳ではわかりませんが、直訳は「大きな喜びが、これから先に、やがて天にあることでしょうか」となる。今ではなくて、これから先にそのようになる。そう言っている。

## 2) 神の御使いたちの前にあるのです (今すでに)

では10節はどうか。「あなたがたに言います。それと同じように、一人の罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちの前には喜びがあるのです。」

「神の御使いたちの前には喜びがある」、これを直訳すると、「神の御使いたちの前には、今すでに喜びがあふれています」となる。7節のところと比べてみてください。喜びがあることは同じなのですが、7節は未来のこととして、10節は今現在のこととして表現されていて、時間が異なるのです。一人の罪人が救われることには変わりがないはずなのに、どうして喜ぶ時間が違うのか。ちょっと疑問です。

## 3) 罪を悔いるけれど

そのことは後で見ることにして、いずれにしても、このたとえ話は、一人の罪人が悔い改めることがどれほどに大きな喜びであるのか。そのことを言おうとしているのはわかりました。それは嬉しいのですが、一つだけ皆さん引かかるところがあるはず。「悔い改める」ということばです。読んでおわかりのとおり「悔いる」と「改める」の二つのことばでできています。大変なことをしてしまったことに後から気がついて、後悔する。これが悔いるという意味です。特に聖書においては、神に対して罪を犯してしまったことを悔いる。そんな意味で使います。

例を挙げましょう。モーセの十戒のなかに「姦淫してはならない」とあります。私は男性ですから、若い女性が肌を露出して道を歩いているのに目が行ってしまいます。イエスは心の中で思っただけでもダメですと言われましたから、私は罪人だと思っただけで悔いるわけです。よく、クリスチャンは罪を犯さない聖い人たちだと誤解しているかたがいますが、むしろ反対で、クリスチャンというのは、モーセの十戒を守ることができなくて悲しんでいる者。そう言い直してもよくて、その筆頭が私ということ。そんな私たちが、どうして毎週教会に

来て神を礼拝して喜んでいられるのでしょうか。聖書にこう書いてあるからです。「この人は罪人たちを受け入れて、一緒に食事をしている。」これを言ったのはだれか。イエスに反対の立場の人たちです。自分は罪人だと悲しんでいる者を、イエスが喜んで受け入れてくださる。だから私たちは安心して教会に来るわけです。

## 4) 改められない

「悔いる」はそれでわかった。ではもう一つの「改める」はどうでしょうか。悔いたらもう二度と同じ過ちはしない。それが悔い改めるということではないか。ところが皆さんも経験されているとおり、それができないから困っている。私も夏になるたびに、視線がそっちの方についてしまって一向に改められない。信仰が足りないからか。そうかも知れませんが、でも言い訳するのではありませんが、実はパウロも同じでした。ロマ書7章18節。「私は、したいと願う善を行わないで、したくない悪を行っています。」24節前半。「私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくださるでしょうか。」キリストのためなら死ぬことさえかまわないと言って、生涯をささげて熱心に伝道したパウロでさえこのとおり。まして私たちが、二度と罪を犯さないなどできるはずはない。それなのに「悔い改めるなら」とあるのはどういうことか。

## 3 イエス・キリスト

### 1) 食事をともにする (今)

パウロがロマ書7章25節でなにを語ったかを見てみましょう。「私たちの主イエス・キリストを通して、神に感謝します。」直前まで嘆いていた人が、神に感謝するのです。なぜか。今日のところにとおり。イエス・キリストが罪人を受け入れてくださる。その取税人や罪人とされていた人たちは、どのようにしてイエスの所に向かったのでしょうか。罪から離れてきよくなってからですか。罪から離れられないのを悲しんでやってきた。そんな彼らをイエスはそのまま迎えます。

その迎え方ですが、ただそこに座っていなさい、ではない。また顔をしかめながら、しぶしぶ食事したのでもない。神の御使いたちの前には、今現在喜びがあると書いています。「神の御使いたち」と、まるで他人ごとのように言っていますが、これはイエスご自身のことです。やがてあなたがたが罪を改めたら喜んであげる、ではありません。改められないと悲しんでいる者を見つけて、イエス

は喜ぶ。だから私たちは、安心して教会に来られるわけです。

## 2) 天において (やがて)

最後にわきに置いていた問題を考えます。7節にこうありました。「一人の人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人のためよりも、大きな喜びが天にあるのです。」

九十九人も正しい人がいるのかと驚いてはいけません。この場面で言えば、パリサイ人たちのことを指します。自分たちのことを正しいと思っていますから、悔い改める必要がないのも当然なわけですから、イエスは誰を探し求めたでしょうか。自分が正しいと思っている人ではなく、自分は間違ってしまった。そんなふうにして悲しんで悔いている人たちを捜し求めます。そんな人が見つけると、大きな喜びが天にある。それが未来に起きる。なぜ未来なのか。神の御国に迎えられるときのことではないでしょうか。天の御国の食卓で父なる神と一緒に食事をするときがやってくる。それは大きな喜び、歓声が湧き起こるとき。私たちはそこに向かって歩んでいます。

そのことは、地上を歩んでいるいまの私たちにどんな影響を与えるのでしょうか。ロシアとウクライナの戦争が早く終わるようにと私たちは祈っています。武器や経済制裁のような力だけが戦争は終わらせる唯一の手段であると考えている人たちから見るなら、祈る私たちは鼻で笑われるだけでしょう。本当に祈ることで世界を変えることができるのか。ミサイルや戦車のような圧倒的な力を見せつけられるとき、私たちもどこかで自信がなくて揺れ動きます。祈っても世の中は変わらない。そんな無力感を覚えていたかも知れません。でも天でこれほど大きな喜びが湧き起こるならば、私たちが祈ることは、決して小さなものではない。私たちが思っている以上に大きな働きなのではないか。

やがて天の御国の食卓に着くときの喜びを見上げながら、また祈りつつ歩んでまいります。